



全国曹洞宗青年会

# S O U S E I

vol.  
**213**

2026  
May

「仏の道」を歩む

く人々とともにく



特集

# 「仏の道」を歩む

～人々とともに～

曹洞宗の修行道場では、「大衆一如」の考えを基本に修行僧として同じ方向を向き、サンガを形成して法灯を守ってきました。しかし現在では、修行道場での生活を終えた後は各師寮寺に戻り、檀務に追われる毎日を過ごす方が大半であるかと思えます。

現代の寺院では「集団生活」から「個の生活」へと変化し、目まぐるしく変わる現代社会の中で、仏道修行の方向性を見失ってしまうのではないかと感じることがありました。『正法眼蔵』『道心』の巻に「仏道をもとむるには、まづ道心をさきとすべし」とあるように、仏道を歩む僧侶にとって道を求むる心を持つことは何よりも重要です。檀務に限らず僧侶としての「道をもとむる心」は常に念頭に置いて行動する必要があるといえます。

その中で修行の基点の一つとなるのは菩提心であり、「自未得度先度他の心を発す」ことではないでしょうか。人々に手を差し伸べ、ともに歩もうとする姿勢が大切であると思います。

今特集では、僧侶として、宗教者として仏の道を模索する方々の想いを取り上げます。僧侶として葛藤しながらも進み続ける姿、また全身全霊をかけて仏像と向き合い続ける仏師の姿を通して、自分自身の生き方、道をもとむる姿勢を振り返り、それぞれが思う「仏の道」の在り方を参究していただければと思います。今特集を企画いたしました。

文／広報委員 南澤亨全

※「葛藤」の注釈

『正法眼蔵』『葛藤』の巻では、正しい法(教え)が、師から弟子へ伝わることを指す。現代では、心の中であることについて悩み、自分自身と戦うことを意味する。



にしだ

しんこう

にしおか

りょうしゅん

西田 稔光 師

西岡 良峻 師

栃木県足利市明林寺副住職

平成26年より、2年間の大本山永平寺安居を経て曹洞宗総合研究センター教化研修部門へ入所。自身の好きなヒップホップカルチャーを活かしたYouTubeの活動、大学での坐禅講義や布教研鑽グループ「煩惱寺」の活動等を通して、現代社会に適し、なおかつ教えを損なわない布教化のあり方を模索する。

神奈川県相模原市正泉寺住職

平成27年より、4年間の大本山永平寺安居。正泉寺ホームページ内のブログ「日日是好日」にて法話や祖録の自己流解説などを掲載。Instagramでは境内での「ひまわり展」の様子も公開。現代における僧侶やサンガのあり方を模索する。

# 「葛藤〜青年僧侶の現在地〜」

「仏門に入ること志したきっかけを教えてください。」

**西田師** 僕は幼稚園ぐらいのときに、ふと死ぬのが怖いと思っていて、そこからずっとその恐怖を抱えていました。大学で仏教を勉強するようになった時も、それが仏教と結びついてはいませんでした。大学4年生の時に、僧侶だった祖父が穏やかな表情で亡くなった際の様子を見て、もしかしたらこの道に死ぬのが怖いということに向き合うヒントがあるかもしれないと思ったのが大きなきっかけでした。

**西岡師** 私は大それた理由もなく、何となく修行に行ってみようかという形でした。中学、高校で仏教を学びましたが、西田さんの経験と同じで、知識だけをぱりっとならしてしまわれて何が自分に必要なのか、当時はよく分かりませんでした。大学では農学を勉強しサラリーマンになったあと、ふとしたときに何となく修行へ行こうと決意しました。それまでの小さなきっかけが積み重なって修行へと突き動かされたのかと思います。

**西田師** 意外と大きなきっかけってないものですよ。もしかすると、どこかで特別なきっかけや宗教体験を持つていなければならぬかと思ってる宗侶が多いのではないのでしょうか。祖師方の言葉に触れたりすると、発心していることの素晴らしさが説かれていて、より一層「自

分はこんな気持ちでいいのだろうか」と葛藤が生まれるのかもしれない。ただ、劇的な理由はなくても、修行に行っている中で発心を固めていくことが重要であり、そこに後ろめたさを感じることはないと思います。

**西岡師** そうですね、西田さんがおっしゃったように、修行中に自分のテーマ的なものを見つけて発心していくことが大切なのではないでしょうか。行持道環といったときに、最初は発心じゃなくてもいいと思います。発心修行菩提涅槃の順ではなくて、修行スタートで後から発心でもいいのではないかと。

**西田師** それから、これは修行中に感じていたことですが、修行を専門学校のように捉える方が多い印象がありました。どこかの寮舎に行くところという能力を身につけていく感じがします。修行は1回育ててきた自我を挫くことに大きな意義があると思います。修行中、ある役寮さんに「修行道場は何かを身に付ける所じゃなくて、自分の出来なさを知る所だよ」と言われたことがあります。この言葉が一つの真理ではないかと感じています。

**西岡師** そう思います。僧堂に身を置いたら立つ位置や挨拶する場所、口上が決まって、何の自我意識の介入も許さない徹底ぶりがあるじゃないですか。一見意

味のないようなことの中で捨てるべきものが次第に分かっていきますよね。

**西田師** つらい修行とよく言いますが、修行生活をつらいと感じるのは、自分がそれだけ本来の仏道とかけ離れた生活をしてきたことを思い知らされているのかもしれないですね。結局つらい修行をしたかではなくて、なぜ修行をつらく感じたのか、いかに自分がエゴを抱えていたのか、ということにこそ学びがあるはずですよ。

「これまで行われてきた活動について教えてください。」

**西田師** 私は大本山永平寺で2年間修行した後、総合研究センターの教化研修部門に行つて、その中で布教教化について学びました。そこで大きかったのは、試

行錯誤をする場を設けていただけなことですよ。あとは趣味の延長ですが、元々ヒップホップカルチャーが好きなので、アーティストの言葉や歌詞を僧侶の視点から見て考察することを YouTube でやっています。私は布教化においては仏教の視点のおもしろさを伝えることが重要だと考えているので、それを試験的に実践しています。他には、細々ですが、総合研究センターの後輩たちと布教化について考えるグループ「煩惱寺」としても活動しています。

**西岡師** 私は日々の行持を行ずることを大切にしている、特に意識した活動は特にないかと思えます。ホームページで祖録の解釈を載せていますが私のメモですし、参禅に來られる方との勉強会の資料なので、対外的に発信しているというわけではないです。あとは植物が好きで、境内にひまわりを2500株植えました。それが好評で、タウンニュースに取り上げられました。意図せず広まったので、何か活動しようと思ったわけではないです。

**西田師** それは素晴らしいですね。今はお坊さんの活動が現世利益的になりやすいというか、こういう結果を目指してお寺に人を集めようといったものが多くなっている気がします。その点、好きな花を植えたなら人々にとって良いものだったというのは理想的だと思います。

あとは都内で定期的におこなっている坐禅会があつて、そこで『般若心経』を読み進めていく講座を1年間、10回に分けてやりました。ただ、読んでいくうちに自分自身の理解が食い違ってきて、講座開始時と終了時の見解が変わってしま



対談にて明林寺

い、参加者の方に以前と話したことが違つてすみませんと謝りました。しかし参加者の方に「ここに来ている人は西田さんの言葉はすごく勉強になると思つて来ているけど、一番は西田さんが成長していくところを楽しみにしているんですよ」と言われてすごく気持ちがいいと思つました。僧侶は訂正が許されないと思つている人が多いかもしれないけど、正直にこうでしたと素直に言えた方が自分の理解も、参加者との距離も深まっていくのかと思います。特に、青年僧侶は変化が許されるはずですよ。

**西岡師** 学んだ内容をアウトプットして誰かに聞いてもらうことで、初めて自分の中でも気づきがありますよね。そういった活動、聞き手がいることが重要ですよ。

**—自分が変わるきっかけになった出来事はありますか？**

**西田師** 総合研究センターに入ったときに、特別養護老人ホームでの実習の初回に十分ぐらいの自己紹介をすることになりました。私は当時、自分は人前で話すことが得意だと思つていたので、4箇所それぞれに内容を変えて、ありがたいところが好評をいただいていた。ところがある時、ある利用者の方が「嘘つくな！」と叫んだのです。私はすごく動揺しました。どこかで打算的になつていた自分が見透かされたように感じたのかもかもしれません。

**西岡師** どこかにある慢心を本当についた一言だったのかもかもしれませんね。

**西田師** はい、偉そうというか、いい話をしよう、誉められようという名利を求めめる心がどこかにじみ出ていたのかもかもしれません(笑)。

**西岡師** ある葬儀の際に私より若い方が亡くなって、「何を話していいかわかりません。師匠だったらどう話しますか?」と聞いたことがあります。そして師匠が「正直に言ってみろ。申し訳ないけどかける言葉が見つかりません。だから一緒に考えさせてください」と。変わるきっかけではないですけど、たとえ答えは出せなくても向き合い続ける大切さをその一言から学びました。亡き人の死を受けとめる際に、言葉が必要としない時もあるのかなと思います。弔う際に、ご遺族が亡き人との関係性を再構築していくサポートをする。

**西田師** 私も法話の原稿を作っていて、中々うまくいかなかった時がありました。師匠に相談したら、「人に教えるようになってほしいので喋らず、とにかく自分が学んだことを人に話せ。相手を変えようなんて思わなくていいから、自分がどう変わったかを話せば、あとは聞いた人が自分なりに噛み砕いてくれるんだ」と言われたのがすごく大きかったです。私たち僧侶は、2500年分の仏教の蓄積が今の信用の土台になっています。自分がどうするかより、堂々とお釈迦様の使いとして、自分の言葉じゃなくて祖師方の言葉ですと素直に言えることが大事かもしれません。

**—仏の道を歩む上で感じることはありますか？**

**西田師** 総合研究センターに行つてよかったのは、檀務に入る前に、自分の修行生活を、仏教を通して振り返ることができたことです。修行でやってきたことの裏付けや、当時の自分の心境を仏教的に紐解くという時間を設けることができました。多くの曹洞宗僧侶は、修行が終つてからすぐに多忙な檀務が続き、修行生活をじっくり振り返る余裕がなく、修行が思い出話になりやすいのかなと思つています。だからこそ修行から帰つてきた人が、当時の気持ちや心境と向き合つて、仏典などから自身の視点を変えて思考を深める時間を設けるのが重要だと思つています。修行道場は信仰の土台を築く場所だと思つています。そのときの経験をどんどん裏付けていくことによって、仏教に対する信頼が深まっていくのではないかなと思つています。

**西岡師** 安居中だと、皆その日の公務に必死でアウトプットする余裕もないですし、確認作業すらできないですよ。

**西田師** はい、そうになると、厳しい修行生活でしか語れないと思つています。自分の心がみじめに思える話でも仏教で分析していけば法話にできます。修行中の過ちを仲間内だけのものにしないで、堂々と仏教の観点から見たら、この対応が良くなかったと話せるようになればいいと思つています。

**西岡師** それこそ「布薩」ですよ。いいことも悪いことも、みんなでもう1回確認し合つて次に生かす。どんどんそれを積み重ねていくという布薩が重要ですね。

**西田師** 布薩も月2回ですよ。修行中に限らず仏法を伝えていくために自分の行いを省みることは布薩の要素がすごくあるなと思つきました。

**西岡師** 修行中、当時の役寮さんに「晩課とは何ですか?」と聞いたときに「布薩だ」と言われました。なぜ四弘誓願文を唱えるかと言つたら昔は日没が1日の終わりだったので、夜坐の前に、1日の反省をしてもう1度誓いを立てるという反省作業が重要であつたという話を伺いました。

**西田師** 四弘誓願文は布薩をする上で重要ですよ。とうていできないことを誓うわけじゃないですか。できないことを理想にして、堂々と掲げながら、それでも100点には及ばない、ということをずっと繰り返していくことが大事だと思



# 特集 「仏の道」を歩む

～人々とともに～

います。できるふりをするよりも、至らなさを覚えてもらいながら、皆さんとともに歩んでいきますという姿勢が現代において必要かも知れないですね。

**西岡師** 再現性が取れないぐらい私たちが人間の心はもろくて、だから常に反省して積み重ねていくという確認作業が重要になるはずですよ。

**西田師** 今は昔ほど厳しい指導がなくなった分、自戒や自律をするという、自分に厳しくすることが修行をする上での核になると思います。後から振り返って「あの時自分を律するべきだった」と思いつくすのもいいので、今、この瞬間の自分が為すべき修行に向き合うことが大事だと思います。

**西岡師** 自分のテーマに沿って、仏道をひたむきに歩んでいる人を探してみると良いと思います。この人はこういうことに向かって仏道を歩んでいるのかとわかって、その人の熱量やモチベーションに感化を受けながら自分も歩んでいくことが重要なかと考えています。

私は師匠から影響を受けております。生きるテーマこそ違いますが、宿題と反省を与えてくれます。また「自分自身のサンガを持ちなさい」と常に言われます。自分自身の仏道を歩むうえで、法友・勝友は欠かせない存在だと思います。

―**ともに同じ時代を歩む青年僧侶へメッセージをお願いします。**―

**西田師** 私もまだまだ試行錯誤の最中です。一緒に頭を使って一緒に悩むことができるので、役に立てることがあったら

SNSのDMでもいいので一緒に悩ませてください。

**西岡師** 道に迷ったら『正法眼蔵随聞記』を読みましょう。周りに反省を促してくれる人がいなくても『正法眼蔵随聞記』を読むだけで、後ろめたくない方はいないと思います。私の周りには勉強熱心な方は、本がボロボロになるまで繰り返し読んでいます。常に行持を行っている方は、仏法が体からにじみ出ている方、法話を聞かなくても、会話をしなくても分かる気がします。そういう方を目指してほしいし、『正法眼蔵随聞記』を読んで、どこが後ろめたいのか日々自分を点検して精進すべきだと思います。

**西田師** 『正法眼蔵随聞記』だとハードルが高かったら、『スッタニパータ』や『ダンマパダ』など短い詩の経典から始めるのがいいと思います。お釈迦様が修行僧たちに説いたことを読むだけでも気持ちが高まります。その時代の方は、私たちの中ではモチベーションが違う到底及ばない方たちだと思いがちですが、読み進めていくと意外と私たちと同じだとなりえます。安心して未熟でもいいし、そこから精進を重ねれば良いと思います。

**西岡師** やらない理由を並べ立ててやらないよりは、一歩踏み出しましょう。踏み出すのが怖かったら、私ではなく西田さんに相談してみてください。(笑)。大いに葛藤し、ともに参禅に励んでいきましょう。

取材／広報委員 南澤亭全  
広報委員 本田真大

## 「利他の心」災害支援の最前線で見えた道筋



はやし えい じゅ  
**林 映 寿 師**

長野県小布施町  
真言宗豊山派浄光寺副住職  
仏教離れが進む現代において、いかに必要とされる寺院になれるかを課題にあげ、数々の寺子屋活動を行う。  
東日本大震災を機に、一般財団法人日本笑顔プロジェクトを創設。  
農業 × 防災のアミューズメント型施設「nuovo」の運営を行い、災害大国日本において、平時を楽しみながら「備災力」を高める事業を展開している。

―**仏門に入ることを志した、発心したきっかけを教えてください。**―

私は小学校3年生のときに得度したので、何かそこにすごい発心があったかといえはなかなかそうではなかったなというのが正直なところですよ。ただお寺や僧侶の役割を考えたときに、社会課題を解決していくことが役割かなと思ったことがありました。医学がこれだけ発達しても、心の病や苦しみを抱えている人の数は、ますます増えています。ただ医学が発達していない時代でも、お寺や僧侶は人々の心のケアをしていく役割があったと思います。人間の悲しみや苦しみに対して、我々は医学的根拠じゃない部分から救えるアプローチができるのでは

ないかと思っただのが発心のきっかけです。

―**これまで行ってきた活動について教えてください。**―

自坊である浄光寺は元々武士が戦に行くと際の必勝祈願をしていたお寺で、将軍直々の祈願所だったため、父の代まで檀信徒の方は0軒でした。ただ農地解放などの社会的政策によってそれまで通りの寺院運営は難しくなりました。私は大学を卒業してから自坊に戻りましたが、お寺に「人を」集めるよりも、お寺に自然と「人が」集まる場所にしたいという思いがありました。第一歩として寺子屋の体験を始め、本堂の中では静かな五感の

体験として「筆遊び」を始めました。書道や習字ではなく、楽しく自分の想いを筆に託そうといったものです。外では自然の中で体を動かす遊びや、綱渡りのようなスラックラインというスポーツをして、静と動の寺子屋を始めました。そのおかげで、徐々に地域の皆さんが集まる場になっていきました。

平成23年の東日本大震災をきっかけに、筆遊びで笑顔という文字を書きました。当時僕ができることは文字に書いて、みんなと笑いあえず笑顔でいようねという発信だけでした。ただそれがたくさんの反響を呼びました。その後、子どもたちの学習用具が津波で流されて何も無い現状を知りました。支援物資は届くけど、文具は平等に分配されないという話を聞いて、その年の4月に、初めて東北へ行って文具を配ったのが「日本笑顔プロジェクト」を創設した最初のきっかけです。宮城県女川町へ行きましたが、学校の周りががれきりでも子どもたちが元気に歌を歌ってくれたことがとても印象的で勇気もらいました。同時に、1回で支援を終わらせるほど無駄なことはないという使命感にも駆られました。また、学習支援として子どもたちに筆で書く楽しさを伝えてもらえませんかというオファーをいただいて約2年間、月1回は女川町へ通わせていただきました。

—この防災施設に込められた想いをお聞かせください。

令和元年の台風19号災害では、千曲川の決壊によって地元で災害支援を行いました。ただ、人力での泥との格闘に限界を感じて、重機の資格がある方と重機を提供してくださる方の募集をかけました。両方とも集まりましたが、資格保有

者の大半が車でいうペーパードライバーでした。調べたら2日で重機免許が取得して免許更新がないことを知りました。

資格を取れる場所は全国にたくさんあるのに練習できる場所は全国に1ヶ所もないことを知ったときに、今後の災害に備えて一般市民で重機を動かせるようにならないといけないと思いました。自分たちの手で町の復興を支えないとダメだと思い、開設したのがこの「nuovo」という農業 × 防災施設です。ゴルフの打ちっぱなしのように、重機の掘りっぱなしができる場所を作ろうと思い、実現させました。建設土木業だけに活きるものではなく、防災とアミューズメントパークを一緒にしたら人は来るかもしれないといった発想で行いました。中には、個人がやることではないと反対する方もいましたが、私は前例がないと言われるとわくわくするタイプなので挑戦しました。5年経ってまもなく3000人の重機オペレーター数になります。

令和6年の能登半島地震の際には、通常であれば5時間で到着するところを18時間かけて被災地域に入りました。倒壊する家屋が多くて手に負えない状況でした。倒壊した家に家族が生き埋めになっているところを、車のジャッキを使って人力で必死に持ち上げようとしたという話を聞きました。助かる命も助からなかった方たちがたくさんいらっしゃる。生存の壁が72時間ということ考えたときに、長野から駆け付けただけでは限界があるので将来的には全国に「nuovo」の拠点をつくられたらと思っています。

—被災地支援での活動で心がけていることはありますか？

あくまでも重機を使うのはツールの一

つであって、住民の皆さまに寄り添うことが重要だと思っています。ある被災地域で、土砂が流入している中で植木も撤去していいと聞いて復旧作業にあたったときがありました。ただ作業をしていく中で、その植木はおばあちゃんが嫁いだ時の記念樹として大切に育てていたのでできれば残してほしいという切実な想いがあることを知りました。やはり漂流物をすべて綺麗にするという物質的な復興ではなく、思い出は思い出として残してあげられる心の復興が重要だと改めて感じました。それが民間のボランティアが唯一できることだと思います。

—僧侶がすべきこれからの備えを教えてください。

行政は、あくまで平等に理念を置きまします。全員に行き渡らないものは逆に混乱になると判断をします。例えば2000人分の水が必要という中で199本しかないとお水を配ることはできません。それが今の災害対策法のルールですし、避難所運営のマニュアルなのでやっていくことは間違っていないです。行政だとマニュアルで縛られる部分が多くありますが、お寺だとある程度自由が利くと思います。公的な避難所は体育館や学校ですが、避難者が増えるほど、公的なところには入れない可能性が出てきます。そういった時にお寺で受け入れをしていく必要があると思っています。普段から地域とのコミュニケーションを構築しておくことが重要だと考えています。

—これから仏の道を進んでいく上での目標、ともに同じ時代を歩む青年僧へのメッセージをお聞かせください。

私は師匠から否定されたことがほとんどなく、それが必要だと思えばやってみたいと常に言われていました。今も師匠の理解と応援が一番の励みだと思っています。今年50歳になりますが、青年僧侶の皆さまは失敗を恐れずに、前例なきことに挑戦してほしいです。

私自身も挑戦したいことがあります。首都直下型地震を想定したときに、東京23区内、できれば山手線沿いに「nuovo」の施設を作りたいと思っています。昨年8月から実証実験として、東京都豊島区と連携して、廃校のグラウンドを使って重機講習をしております。私は「平時を楽しみ、災害に備える」をモットーに生きています。今は防災減災の時代だと言われていますが、私は災害を防ぐという防災は不可能だと思っています。いかに発災後に生活再建をいち早くできるかが鍵です。例えば富士山の噴火を止めるのは無理ですが、噴火した際の



「nuovo」内の防災井戸



重機講習の様子

備えを持つことが大切です。「備災」という言葉を使いますが、それを楽しくできたいと思います。正直、人生の中で僧侶でありながら重機のレバーを握るとは思ってもみなかったです。ただここまで災害大国になってしまった状況からすると、我々僧侶はお寺を護持していくだけでは難しいと思います。困っている人たちにどれだけ知恵や労力を使い、施せるかがものすごく問われる時代だと実感しています。宗派や青年会単位でのそれぞれのやり方があるとはいえず、1人の僧侶としてやることを今のうちから考えておかなければいけないと思います。

我々の開祖である弘法大師空海は、密教伝来とともに、その時代の生活を支える社会課題に貢献された方です。ため池

作りなど土木にも精通されて、僧侶だけではなく多方面で活躍されました。そういったことから、もしお大師さんがこの時代に生きていたら今どうするのかを常に考えています。おそらく今の時代なら重機に乗っていたのではないかと、う勝手な解釈をしています。祖師方の教えのもと、青年僧侶として仏の道を歩む際にもっと泥にまみれて苦しんでいる人たちと同じ状況下で生活再建を計るのも修行の一つではないでしょうか。自分自身に試練を与えて、その時々を試練を乗り越えていくという信念を持ち、ともに利他の心で努めていきましょう。

取材／広報委員 南澤亨全  
広報委員 佐瀬悠真

「三世を紡ぐ仏師の歩み」



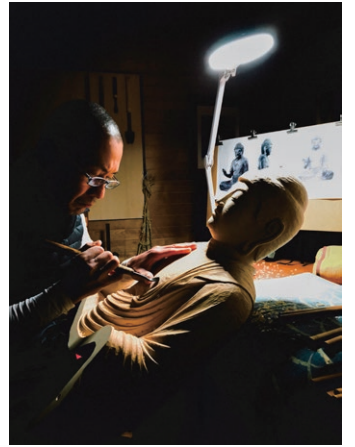
かとう ぎざん  
加藤 巍山氏

仏師、現代アーティスト。  
昭和43年、東京都生まれ。  
自らと同じように傷を抱える人々を救える仏像を作りたいと志し、仏師としての道を決意。  
高村光雲の流れを汲む仏師・岩松拾文氏に師事。  
約13年の修行を経て、独立。  
仏像だけでなく、日本の古典や仏教を題材とした作品を多数制作。  
TBS「情熱大陸」等、多数メディアに出演。

「仏師を志したきっかけ、その道程を教えてください。」

私は中学生の頃からギターを弾いており、音楽の専門学校を卒業後、プロのミュージシャンとして活動をしておりました。ミュージシャンとして世界でも活躍したいという夢がありました。その頃から自分を追い込む癖が災いして自分の意思で自由に手が動かさなくなるジストニアという病気を発症し、それが原因で夢が絶たれました。そういう失意の中で、1人で鎌倉に出かけるようになり、そこで日本文化や歴史の素晴らしさに気づいたと同時に仏像と出会い、救われたいという思いと仏像を彫りたいという思いが重なって、仏師の道に進みまし。導かれたという表現の方が正しいのかもしれない。

仏師としては約13年の修業期間がありました。最初の頃は何もわからないまま体当たりで必死に喰らい付いて彫っていたと思います。日々納期に追われ、手に豆を作って血だらけになっても手をテーピングでぐるぐる巻きにしてノミを握り、痛みのあまり時には吐き気を催しながらも彫り続けていました。修業時代は先生の指示の下、自分の意思などない、まるで木を彫るマシーンのように、ただひたすら目の前の仕事に明け暮れていました。その時期に自分自身の自我を徹底的に破壊されたように思います。今振り返ると、一度自分自身を徹底的に壊し、壊されたという経験が非常に良かったと思います。



—仏師として日頃から心がけていることを教えてください。

自分は他の仏師さんとは少し異なる稀有なポジションにいます。

仏師でありながらも現代アーティストとしてアートの世界でも活動をしています。現代アーティストとしては自分の思想やコンセプト、或いは自分の熱を込め、今の時代に何を表現し、何を未来に残すのか、あらゆる可能性を探り自問自答を繰り返しながら作品を制作しています。

一方で仏師は、伝統に則った仏像を彫り出すことが第一義とされます。自分でこう表現したいというエゴを消して仏様のお姿を表すことだけに只々自分自身を投げ込むことに徹しています。

それゆえに日々の生活をルーティン化し、雑音となるものを遠ざけ、日常を調えることで作業に没入できる環境を作っています。起きる時間から寝る時間、休憩もほぼ決まっております。食事や人と会うことも制限しています。自分自身を一定の状態に保ち、常に濁りのないコンディションで仏様に向かうことを心がけています。

—仏像に対しての想いをお聞かせください。

宗教が体系化される以前から人類は祈り続けてきました。「祈る」という行為の中にこそ人としての歴史と尊厳があります。何千年と祈り続けられてきた人類の歴史に想いを馳せ、そしてこれから先、1000年、2000年の未来に向け、どんなにテクノロジーが発達したとしても人は祈り続けるでしょう。何千年という太古から、未だ見ぬ未来という人類の時間軸と、私に与えられた寿命という命の時間軸、2つの時間軸に立ち仏様と向き合っています。

現代の仏師の技法や様式は運慶・快慶の頃からほぼ変わっていません。しかしそれ以前の平安中期や平安初期、奈良時代、飛鳥白鳳など、仏教が日本に伝わってきたからその時代その時代によってお姿や様式は変遷しています。

私自身、己を消し、儀軌と様式に則って仏像を造像することを第一義と考えていますが、先に述べたように時代によって仏像の様式も変わってきました。そういった意味においても現代に即したお姿や様式で表現するというにも必要に迫られているのではないかと考えています。

仏教には今を生きる人にとって支えとなるような教えや言葉があるにもかかわらず、現在は宗教と一般社会とのズレや距離があ

ることは否めません。そのズレをなくすことは非常に困難ではありますが、私自身の役割として今を生きる人の心に届く仏像を表現し橋渡しになればとも考えています。

如来像や菩薩像はお姿や様式を大きく変えることは憚られますが、例えば天部ですと自由度が増してくるので表現の幅が広がります。仏像を知らなくても「格好いい」とか「綺麗な」など、感性として自然に感じ取っていただくことで親しんでいただき、その人の心を支えるお守りのような存在であったり、またそのことをきっかけに仏教を身近に感じていただけられるようになれば嬉しく思います。

現在、愛知県稲沢市の真言宗寺院のご依頼で十二神将像を彫っております。それは今まで見たこともないような、加藤にしが表現できないと言っても過言ではない十二神将像を造像しております。その像を通して仏像や宗教から縁遠い方も興味を持っていただければ有り難く思います。

仏師という立場ではどうしても超えられないボーダーが存在しますが、現代アーティストとして持っているスキルと可能性を最大限に生かし、勇気を持ってそのボーダーを超え、宗教や民族、国、時代を超えて、世界中の多くの方、そして未来に向けて「祈り」ということを伝えていくことが私の使命だと思っています。現在、日本国内だけではなくヨーロッパやアジアなどでも作品を発表させていただいており、世界中の多くの方に仏像や彫刻を通してメッセージを発信しています。

仏像を彫る際は木曾檜などの木材を使っています。自分が選んだと思っている木は元々仏様になる仏性が宿っており、その木材に呼ばれて自然とそれを選んでいっていると思います。自分が選んでいると思いが導かれているという感覚でしょうか。木材の中でも木曾檜は仏像を彫ることに關して非常に優れた木です。粘りもあり木質も美しく、乾燥したら狂いが非常に少ない。

約800年、檜が多くの仏像に採用されてきたことはそういった側面があるのでしょう。

彫っていることに没入している時には、自分と仏様だけで対話をしているような境地になります。小作りから仕上げの段階で形は徐々に現れてきますが、形出しや荒彫りなどの初期の段階では私と作品との距離があるように感じます。しかし、ただひたすらに彫り続けることによって、ふとした瞬間に何かが通い始めるのです。諦めずただただひたすらに目の前にある小石を一つ一つ積み上げるような作業の先にふっと何かが宿り、鼓動を打ち始める瞬間があるのです。

—自分が変わるきっかけになった出来事はありますか？

ミュージシャンからの挫折や絶望的な出来事を経験し、その中で仏像と出会い、藁にもすがらうような思いで微かな光を辿り、その中で徐々に道が開け希望が見えてきたような感覚がありました。臨濟宗の僧侶の方が仰っていた言葉で、「窮じて変じ、変じて通ず」という一文があります。もうダメかもしれないという壁にぶち当たって、それでも諦めずに進み続けていった先に自分自身の変容が起き、今まで見えなかった道が開ける、というような言葉と受け止めましたが、今まで生きてきた実感として肚に落ちてきました。

私の師匠は口数の少ない方でしたが、「信仰心がこもるといい仕事ができる」という言葉が印象に残っており、今でも大切にしています。

東日本大震災が起きた際に、被災地に鎮魂と祈りの仏像を届けたいという想いから、仏像を奉納するプロジェクトを立ち上げ、約7年かけて一体の仏像を奉納しました。その頃は自分の技術で仏様を綺麗に彫ろう、仕上げようという、仏師としての技術を駆



今は海外でも作品を発表する機会に恵まれています。世界中で悲しい出来事が起きますが、祈るという行為は、人類が文字を発見する前から行われていた尊い行いです。だからこそ全人類の未来に向けて宗教、人種、言語、国を超えた人々が祈りを

か？  
— 仏師の道を行く上での目標はありますか？

使って美しく仏様を彫ろうという思いでした。毎年3月11日に現地に赴いて、町が徐々に復興されていき、皆さんの表情や発する言葉が変わっていく様子を目にしていこうと、「自分が仏様を美しく彫るのではなくて、多くの皆さんに祈られて仏様は美しくなる」ということに気づきました。苦しみや悲しみの中で人々が祈り、その切実な想いによって仏様は美しくなっていく...と。そのためには、最前線で仏様の形に表す代弁者として技術を磨く。人々の切実な思いを丁寧に翻訳することで濁りなく仏様を表す。誤訳しないということが大切だと思います。怠ることなく常に自己を磨き、研鑽を積んでいくことが役割を全うする上で大切なことだと肝に銘じております。

捧げられる聖地を作りたいという目標があります。世界から人々が集まって祈りを捧げられるような場を作りたいと。自分が生きていく間に完成しなくても、その志を全人類が共有してその物語を世界中の人々が紡いでいった先に完成するような道筋を作って命を全うしたいと思っております。

— 青年僧侶へのメッセージをお願いします。

私は社会と同じ物差しであったら、宗教者である意味がないのではないかと思っています。若いうちには気づかないこともありますが、お寺を守っていく中で色々な気づきがあると思います。与えられた命を全うしてほしいです。生きるに徹し、死に徹する。僧侶としての命を全うし、仏道においてのもの差して物事をみるのが大事かと思えます。今苦しい思いをされている方も今置かれている場所で自身が花を咲かせることができると思っています。だから皆さんそれぞれの場所で与えられた命を一生懸命全うしていただけたらと思います。

取材／広報委員 南澤亨全  
広報委員長 竹田龍永

## 「不易流行」

「いたずらに過ごす月日はおおけれど、道をもとむる時ぞすくなき」

この詩は、道元禪師が詠んだとされる和歌の一句です。煩惱の赴くままに過ごす歳月は多いが、真剣に仏道を求めるときは少ない。一分一秒を惜しんで、仏道を生きなければならぬという意味の詩です。今回のインタビューでは、そのように寸暇を惜しんで、ひたむきに仏の道を歩もうとする方々の「信念」を取材の中で感じる事ができました。

取材させていただいた4名の方に共通する点は、「仏教の視点から物事を見る」ということです。僧侶として仏事にあたる所作、檀信徒の皆様と向き合う姿勢、檀務を含めた全ての生活の中で、現代社会の見方で物事を見るだけでなく、仏教の視点から物事をみていく必要があります。

そのためには、特集対談にもありましたが、常に祖師方や仏教の教えを参究し、自分なりに言語化していかなければならないと思います。師匠や誰かが言った言葉をそのままコピーするのではなく、日々の行持に照らし合わせて解釈し、自己研鑽することを怠らない姿勢が大事になっていきます。それを繰り返していくことで、自分の行動や言動はどうであったか、仏道に反する行いをしていなかったかかを教えと照らしあわせることができると思います。

昔のように、サンガを形成することが難しくなった現代において、自己の反省や日々の点検だけで仏の道を歩むのは中々容易なことではありません。ただ、ネットやSNSを使えば世界中の誰ともつながることが出来る時代です。正しく仏道を歩んでいる方、道を求めている方の生き方を参考にすることができ、それが自分自身の指針になるはずですが、そういう存在が本来の意味での「法友」であり、「勝友」ではないでしょうか？これは私自身も含めて、肝に銘じ魂に銘じていく必要があるかと思えます。

「10年続けてきたこと  
20年問い続けてきたこと  
30年努力し続けてきたこと  
少しずつ結果が出てくるようになって少しずつ認めていただけるようになった。  
その歩みは牛歩の如くだけど、  
これからも一歩一歩。」

この言葉は加藤巍山氏のSNSにあげられていた言葉です。仏道修行はまさに牛歩の如く、毎日毎日の積み重ねの中で表れていくものではないでしょうか？。昨日の自分と今日の自分を照らし合わせ、青年僧侶それぞれが「道をもとむる人」として今を生きる皆さまとともに前進していくことを願っています。

文／広報委員 南澤亨全

# ソウカイイネツニクワカ

## 曹洞宗兵庫県第二宗務所青年会

全国の加盟曹青会の活動情報を共有し、青年会活動のさらなる活性化を目指す本連載。今号は、曹洞宗兵庫県第二宗務所青年会をご紹介します。

### 青年会情報



#### 曹洞宗兵庫県第二宗務所青年会

平成8年発足

会員数 25名

会長／坂口靖周(取材時)

頼光寺 住職

■会の概要と発足の経緯について教えてください。

曹洞宗兵庫県第二宗務所青年会は平成8年の発足より歩みを進め、本年30周年を迎えます。発足以前の管内には、丹波篠山地域に「曹友会」、丹波地域には「圓通会」、但馬地域に「但馬曹洞宗青年会」という3つの青年僧侶団体がそれぞれの地域に根ざした活動を個別に展開しておりました。

大きな転機となったのは、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災です。3団体がそれぞれ現地に入り炊き出しや行茶活動などのボランティア活動に奔走する中で、互いに情報を共有し、共に活動するようになりました。

震災支援を通じて結ばれた絆を礎として、青年会設立に向けた協議が3団体間で幾度も重ねられ、諸先輩方の多大なるご尽力により会が発足いたしました。以来、管内青年僧侶の地域を超えた交流の要として、また互いに切磋

琢磨する研鑽の場として現在に至っております。

■会の主な活動について教えてください。

恒例行事として、年末には寒行托鉢を行い、管内各地を年ごとに行脚しております。地域の皆様とのご縁を結ぶ大切な修行の場となっております。また3月に開催の宗務所管内梅花流奉詠大会にスタッフとして参加し、大会の円滑な進行をサポートします。

大規模な災害が発生した際には、当会が長年培ってきた経験を活かし、迅

速にボランティア活動を展開してまいりました。平成19年の能登半島地震をはじめ、東日本大震災、地元兵庫での平成26年丹波市豪雨災害、そして記憶に新しい令和6年の能登半島地震など、直接被災地に足を運び、困難に直面された方々の心に寄り添う活動を継続しております。

そして毎年1月17日には神戸市長田区にある御蔵北公園に参集し、当会会長導師のもとで阪神淡路大震災物故者の慰霊法要に随喜いたします。

■会の発足時より大切にされてきた震災法要について詳しくお聞かせください。

震災法要は、全曹青をはじめシャンティ国際ボランティア会(SVA)や近畿連絡協議会(近連協)などたくさんの方々のご縁により始まりました。今日に至るまで欠かすことなく継続している当会にとって大切な行持です。

法要開始の時刻は、地域の皆様や遠方より駆けつける僧侶が等しく集いやすいよう、発災時刻から半日を経た「午後5時46分」としています。夕闇の中、全員で黙祷を捧げ、続く読経では御蔵・菅原地域で犠牲となられた方々お一人おひとりの芳名を読み上げ供養いたします。



震災物故者の慰霊法要

犠牲者の方々が7回忌を迎えられた平成13年には、現在の法要会場である神戸市長田区の御蔵北公園内に、地域の方々の発願で慰霊モニュメントが建立されました。高さ2メートルを超える立方体の正面上部には、兵庫県加古川市出身の大本山永平寺第78代貫首宮崎奕保禅師による「鎮魂」の揮毫が刻まれています。発災直後に大規模な火災に見舞われ、127名の尊い命が失われた御蔵・菅原地域において、この碑は今もなお、亡き人々を偲び御霊の平穏を祈る不変のシンボルとして、地域の方々の心に寄り添い続けていま



全曹青の災害復興支援活動全国研修会への参加

す。私たち僧侶もまた、毎年この「鎮魂」の揮毫を前にするたび、自然と身が引き締まる思いがいたします。地域の皆さまと心を一つに、毎年変わらぬ想いを胸に法要に臨んでおります。

■毎年震災法要に随喜する中で感じる事はありますか。

毎年震災法要に随喜させていただく中で、会の発足当時からこの法要に携わって来られた主催者の方、そして地域の有志の方々と言葉を交わす機会があります。そこで何より心に残るのは、皆さまが口にされる「おかげさま」「ご縁」「感謝」という温かい言葉の数々です。

30年という長い歲月、悲しみを抱えながらも祈りを繋いでこられた方々から、支援する側の私たちに對してこうした言葉をいただくとき、ただただ頭の下がる思いがいたします。皆様のお言葉に触れるたび、この法要が単なる形式的なものではなく、人々の想いや目に見えない無数の「繋がり」に支えられて今日まで受け継がれてきたのだと実感いたします。

■本年度は震災33回忌の年であると同時に、青年会発足30周年を迎える節目の年になるかと思えます。この大きな節目を迎えるに当たっての思いをお聞かせください。

現在、平成15年から発行を続けてきた会報誌を編纂し、30周年の記念誌を製作しています。過去の誌面に目を通すと、当時の会長や会員たちがどのような現実と直面し、何を思っていたのか、その熱量が伝わってきます。震災法要の折に地域の方からいただいた言葉通り、私たちは今、まさに時を超えた「ご縁」の中に生かされているのだと思ひ知らされます。

昨年の震災30年法要では、震災を経験していない世代へ「バトン」を繋いでいく」という言葉を多く耳にしました。これは私たち青年会にとっても喫緊の課題です。諸先輩方が築かれた会の礎、



寒行托鉢の様子

そして発足の経緯に込められた想いを次代へ繋ぐこと。私たちが震災法要に随喜し続けることには、「犠牲者への供養」と「会の原点の継承」という、二つの重要な意味があると考えています。

10年前の青年会発足20周年事業の折に発行した記念誌の中で、初代会長が寄稿した文の中に「青年会もようやく成人式を迎えることができました」と、会を人に例えて表現していたことが非常に印象に残っています。その言葉を拝借するならば、今年の青年会は「30歳」となります。これからは、諸先輩方から託されたバトンをしっかり握りしめ、この33回忌、そして創立30年という節目を良き契機として、自らの足で力強く未来へと歩みを進めてまいります。

取材／広報委員 本田真大

曹洞宗兵庫県第二宗務所青年会から  
出向しています。



広報委員 本田真大

# 「世界とともに歩む」



本連載「世界とともに歩む」では国際委員会との協働のもと、世界中の様々な地域で、様々な機縁により仏道を歩まれている方々をご紹介します。今回は、スタンフォード大学で仏教音楽の研究をしながら、自身も梅花流詠讃歌に取り組むミヒャエラ・ムロス先生にお話を伺いました。



## ミヒャエラ・ムロス 先生

ドイツ出身。バークリー音楽大学卒業後、ハンブルク大学、ミュンヘン大学にて日本学を専攻。駒澤大学大学院博士課程満期退学。仏教音楽、特に講式と声明の研究を行う。現在はスタンフォード大学で准教授を務め、梅花流詠讃歌について研究しながら、自身も梅花講員として詠讃歌に取り組む。



—どのような経緯で講式や梅花流詠讃歌の研究をされるようになったのでしょうか？

高校生のときに、姉からもらった鈴木俊隆老師の『禅マインドビギナーズ・マインド』を読んでとても感動し、近くの禅センターに通うようになりました。そこは臨済宗のセンターで、学生時代の夏休みには日本に参禅にも行きました。そのときに祈禱太鼓を聞いて、その生み出す独特の雰囲気にとても惹かれました。当時は音楽大学でサクソスを専攻していたので、ジャズのドラムのような太鼓の響きと仏教の組み合わせにとても驚きました。

その様なきっかけもあって大学院では日本学を専攻し、日本の仏教音楽を研究することにしました。そうして日本で1年間フィールドワークを行った際に、曹洞宗の講式や声明に出会い、専門的に研究するようになりました。

研究のため様々な法要に参加する中で梅花流詠讃歌を耳にする機会も沢山ありました。特に峨山禪師の大遠忌のときに、焼香師の方のお供えの動きに合わせて奉詠されるご詠歌が儼かな雰囲気を作り出していたのが印象に残りました。詠讃師寮の方々から親しくお話を伺うこともでき、講式の研究を出版した後には、梅花流の研究を始めることにしました。



—ご自身も梅花講員として詠讃歌に取り組まれていますね。

大本山總持寺の梅花講員になって、検定も2回受けました。昨年5月の沖縄での全国大会にも国際グループとして参加させてもらい、登壇もして「同行御和讃」を奉詠し、本当に良い経験ができました。

他にも色々な大会や、お寺の法要での奉詠に参加させてもらっています。それぞれのお寺の梅花講の人達と一緒にお唱えします。本当は他の講に習いに行くのは失礼になるかもしれませんが、研究と



神奈川県第二宗務所管内梅花大会で詠題を務めるムロス先生

いうことで各地の講をまわらせていただく、それぞれの雰囲気があることがわかります。とにかくお唱えを熱心に行っているところもあれば、お唱えと同じくらい講師同士の交友が盛んなところもあります。皆さん、海外で梅花に取り組んでいる人がいることに驚かれますが、すぐに輪の中に入れてくれます。

—その日初めて会う方でも一緒にお唱えできるのが素晴らしいですね。先生はどのようなところに魅力を感じられますか？

やはり梅花には梅花の世界があつて、

一緒にお唱えするとすぐに仲良くなれるのは嬉しいですね。もちろんメロディも魅力ですし、歌詞とメロディが合わさってありがたさを伝えてくれると思います。それから遠くで聞いていたときには気づかなかつたのですが、鈴鉦も実際に自分のすぐ近くで鳴らすと、響きが体で感じられて、清められるような気がして好きです。大学の仏教音楽についての授業で、一度梅花のお唱えを体験してもらうようにしていますが、学生たちも鈴鉦の音が好きだといいます。

—体で感じる響きというのはあまり意識したことはありませんでした。耳以外から伝わってくる魅力も沢山ありますね。

法具の美しさに感心する人も多くです。房の色や鉦敷の模様もとてもきれいだと思います。法具を丁寧に扱う作法からもその大きさがわかります。お作法は自分でやってみるととても難しく感じる場所もありますが、大会で特派の先生方のきれいにそろった所作を見てとても感動しました。

いつも法要に参加しているときにも素敵だなと思うのですが、曹洞宗では作法が修行の重要な方法になっていると思います。応量器を広げるときのような生活の作法もそうですね。梅花では一般の



サンフランシスコ桑港寺の梅花講

人たちがそうした作法の修行を僧侶の方々と一緒に実践できると思います。

—見た目や音を通じて初めての方にも伝わりやすい部分もあり、また僧侶と一般の方がともに教えを実践できるという奥深さも兼ね備えていることがよくわかります。

海外でも梅花に興味を持っている人は多いと思います。サンフランシスコの桑港寺で梅花をすることもありますが、色々な年代の方が参加しています。授業で体験してみて梅花を続けてみたいとい

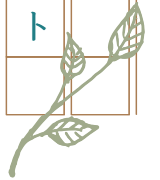
う学生もいます。ただ教えることのできる人が少ないというのが現状です。それと日本語の歌詞をお唱えする難しさがあります。歌詞にローマ字がついているA4の本もあるのですが、『梅花教典』のようなお作法で聞くことはできません。

私は見たことはないのですが、ハワイではウクレレと一緒に演奏するようなこともあると聞いたことがあります。海外の方々も梅花流詠讃歌を「自分たちのもの」と感じられるような工夫も大切かもしれません。

—そうした工夫は、日本で梅花への関心を集めるきっかけにもなりそうですね。今回先生のお話を伺う中で、国境を越えてともに歩みを進めていき、互いの視点を取り入れていくことで、私たちの実践をより深みのあるものにしていけるのではないかと強く感じました。ありがとうございました。

取材／広報委員長 竹田龍永  
国際委員長 高倉秀哲

加盟曹青会  
活動レポート



曹洞宗岐阜県青年会創立50周年記念大会「半途を生きる」

令和7年11月29日、曹洞宗岐阜県青年会創立50周年記念大会として、講演・座談会「半途を生きる」を開催いたしました。当日は一般参加者・寺院関係者を含めた500名を超える方が来場され、講師であるスタジオジブリ・プロデューサー鈴木敏夫さんと我々青年僧侶のやりとりの中で示された禅の視点に、参加者は静かに耳を傾けていました。



鈴木敏夫氏と曹洞宗岐阜県青年会の座談会

講演では鈴木さんのご経験や宮崎駿監督の話題から、ご縁や出会いによって築かれる「自己」についてお話いただきました。座談会では、青年会会員の姿や発言を通して「今ここ」を生きる実践の様子を感じ取っていただけたのではないかと存じます。一般来場者からの質疑も熱を帯びたものばかりで、「生きる」ことへの真剣な眼差しがその学びの多さを物語っていました。

この経験を糧に、今後も仲間と共に学びを深め、各々の現場へ還元してまいります。ご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

文／曹洞宗岐阜県青年会  
創立50周年記念大会実行委員会  
事務局長 小島現由



スタジオジブリ・鈴木敏夫氏（撮影：園田咲子）

岩手県曹洞宗青年会  
創立五十周年記念事業

令和8年2月17日火曜日、岩手県曹洞宗青年会創立五十周年記念報恩・物故会員供養法要が、盛岡市の報恩寺様を会場に厳かに執り行われました。

法要後は盛岡グランドホテルへと会場を移し、創立五十周年記念祝賀会を開催しました。祝賀会に先立ち、これまで岩手曹青の歴史を繋いで来てくださった物故会員諸師への感謝と追慕の黙祷を捧げました。

祝賀会には全曹青・東北地協・東北各県曹青の会長様、岩曹青歴代会長を始め、正会員も合わせて68名の皆様にご出席いただきました。

また、岩手県宗務所長であり第15代会長・釜石市常楽寺・藤原育夫老師、並びに、全国曹洞宗青年会会長・宮本昌孝師より祝辞を賜りました。宮本全曹青会長は、東日本大震災の支援で岩手県沿岸を訪れ



た際に釜石市常楽寺にも足を運ばれていただいたご縁にも触られました。岩手県沿岸部に甚大な被害をもたらした東日本震災の際に全曹青をはじめとした全国の皆様よりいただいた温かいご支援、そのご縁が今日まで続きそして新たなつながりが広がっていく事を実感する、節目にふさわしい温かなひとときとなりました。

余興では西川友法会長を筆頭に有志3人が「栄光の架け橋」を披露し、会場は大いに盛り上がりました。

岩曹青が今日創立五十周年を迎えられたのは諸先輩老師方の熱い思いと築き上げてきたその伝統にあります。現在は少子化等寺院を取り巻く環境は厳しさを増していますが、今後とも岩曹青の伝統を守りながら、青年僧侶が共に研鑽と懇親を深め、会の益々の発展のため今後とも精進してまいりたいと思います。

文／岩手県曹洞宗青年会事業部長  
宇津野智成



## 東海管区曹洞宗青年会大会浜松大会 「人生楽笑」

「笑ってますか??」笑っていいれば何でもできる。

皆さん、毎日楽しく笑ってますか? 幼少時代のように毎日お腹の底から笑っていますか?

今回の大会テーマ「人生楽笑(じんせいらくしょう)」。

世界に目を向ければ、いまだ戦争・紛争が続く国や地域があります。国内も同様に物価高、止まらぬ少子高齢化、昔では考えられないようなじめや事件など、毎日暗いニュースがクローズアップされているように感じます。

さらには、高度情報化社会の加速によるSNS等での誹謗中傷や、人間関係の希薄さが社会問題となっております。追討ちをかけるようにコンプライアンスやハラスメントなど、気にし始めたらしきがないほど息苦しい世の中になってしまいました。



併せてコロナウイルス感染拡大によって生活様式がガラッと変わり、マスク着用でのお互いの表情が読み取れなくなっ  
てしまい、笑顔(表情)が遠ざかってしまったように思います。

また仏教界に目を向けても「宗教離れ」「檀家離れ」「後継者不足」という明るい兆しも見えない課題が山積しています。

そんな社会ですが、仏教には「和顔愛語」「和顔施」という言葉があります。笑顔で接すること、優しい言葉をかけること、相手を幸せにすることで、自身も幸福に感じることです。

常に口角を上げ、柔らかな表情、もつと言えは観音様のような顔を作ることが、多くの檀信徒や、救いを求める人達に必要とされる宗教者の姿なのかもしれません。

今大会では、天台宗道心寺住職で落語家でもある露の五九洛さんによる「笑う門には福来る」と題した一座を設けさせていただき、後半では師による講演も行い終始笑いが絶えない高座でした。

また、第二部では口笛世界一に輝いた口笛奏者儀間太久実氏による演奏会でも技術の凄さにたくさんさんの拍手が鳴りやみませんでした。

参加者全員が大いに笑った大会になったかと思えます。今大会の開催にご助力を賜りました関係各位に会員一同感謝申し上げます。ありがとうございました。

文/静岡県第四宗務所青年会照自会  
大会実行委員長 須賀晶俊



## 東日本大震災慰霊復興祈願法要 福島県 成林寺納経塔

令和8年3月10日、福島県伊達市・成林寺様境内の納経塔前で、全日本仏教青年会・全曹青・WFBY(世界仏教徒青年連盟)の共催にて、東日本大震災慰霊復興祈願法要が執り行われました。

発災時刻の午後2時46分に黙祷を行ったあと、全国の皆様から寄せられた写経を納経し、慰霊と復興への祈りを捧げました。法要の前には宮本昌孝会長が挨拶し、これまでの活動を通じて「寄り添い、



10日の慰霊復興祈願法要

同じ時間をともにすることが、苦悩を抱える方々のお力になる」と気づかされたことを述べられました。全国各地から参集し、またリモートで参加する超宗派の青年僧侶が、多発する自然災害の被災地に寄り添い続ける誓いを心に刻みました。

発災日となる翌11日には被災各県に分かれて法要を営みました。成林寺納経塔前では、佐藤大起副会長が導師となり、檀信徒の皆様や全曹青を通じて復興支援活動に携わられてきた方々とともに祈りを捧げました。

当日のライブ配信のアーカイブ動画は全曹青公式YouTubeチャンネルでご覧いただけます。

文/広報委員長 竹田龍永



11日の成林寺納経塔前での法要

## 宮城県 自照院「活動の灯」

令和8年3月11日、宮城県角田市の自照院様にある「活動の灯」で、東日本大震災慰霊法要が行われました。自照院ご住職・錦織泰禪老師、副住職・錦織誠道老師にもご随喜いただき、梅花講員をはじめとする皆様と一緒に法要を勤めました。

来年、東日本大震災17回忌を迎えます。震災を知らない世代が増えていく中、一人一人ができることを考え、日々を務めていくことの大切さを改めて感じました。

文／副会長 宮本貴心



## 岩手県 龍泉寺「活動の灯」

令和8年3月11日、岩手県山田町龍泉寺様に建立された「活動の灯」前にて宮本昌孝会長が導師を務め法要が執り行われました。冷たい風が吹く中で当時の困難を偲びつつ、地元の岩手曹青会員と共に勤めました。

引き続き客殿に移動し、龍泉寺ご住職石ヶ森桂山老師が導師をお務めになり慰霊法要が厳修されました。法要後は龍泉寺の檀信徒の方々とともに椅子坐禅をし、発災時刻に合わせて黙祷を捧げました。石ヶ森老師は「震災で亡くなられた方々に対して、真心を込めて生きることこそが一番の供養だ」と語られ、今を生きる私たちに命の尊さと「いまここ」を大切に生きることを意味を改めて教えていただきました。

文／広報委員 佐瀬悠真



## 「WFB世界仏教徒連盟 創立七五周年記念式典及び 総会・WFBY世界仏教徒 青年連盟総会・WBU世界 仏教大学理事会」参加報告

令和7年12月4〜7日に開催された大会では世界各国の事業が紹介され、日本からは「東日本大震災慰霊復興祈願法要」や大阪・関西万博での「万博寺法要」、能登の被災地でのボランティアなど、社会に寄り添って歩む日本の青年僧侶の活動が写真を交えて報告されました。

今回の総会で全曹青の顧問を務める村



WFBY総会

山博雅師はWFBY会長の職を退き、名誉会長に就任いたしました。村山師は2018年に大乘仏教圏から初めて選出されて以来、7年にわたり会長の任に当たり、人的交流に大きな支障をきたしたコロナ禍の困難を乗り越えて国際交流の絆を繋げて来ました。

村山師の在任期間を経てより強固となった日本に対する信頼を受け継ぎ、全日本仏教青年会からは新たに来馬司龍師、財津宏経師（浄土宗）が副会長に、倉島隆行師、大久保厚志師が顧問に就任いたしました。IBYE(国際仏教徒青年プログラム)の日本開催が期待されるなか、仏教を通じた国際協調をさらに深化させるべく活動を推進してまいります。

文／国際委員長 高倉秀哲



日本からの出席者

# 寺院と檀信徒の「いま」を守り、次代へ繋ぐ。 100年先を見据える新しい寺院運営のカタチ

時代が変化する中、お寺の抱える法務税務リスクはかつてないほど複雑化しています。  
法と税の専門家であり曹洞宗の僧侶でもある鈴木謙太が率いるチームが、「健全な寺院運営の実現」および「お寺と連携した檀信徒の終活支援」により、貴寺の公共的価値を高め、永続的な護持発展を支えます。

## 曹洞宗寺院に特化した法務・税務支援サービス



- **各種規則の整備**  
時代に即した規則へ改訂。リスクを絶ち次代への承継を盤石に。
- **お寺のトラブル解決**  
離檀や境界紛争等、宗門特有の問題を僧侶弁護士が迅速に解決。
- **行方不明者の対応**  
所在不明・未収問題を法的に解決。放置墓を整理し墓地を健全化。
- **健全な税務サポート**  
宗教法人に精通した税務助言。税務調査対策もお任せください。

### 詳しい資料をお送りいたします

枅野老師との対談の様  
様を掲載したパンフレ  
ットをお送りいたします。



てらさぼ公式ページ



てらさぼをご推薦いただきました

寺院運営においては、その現場に精通した  
プロによる法務・税務のサポートが必要です。

世の中が杓子定規になってきた昨今、お寺にも立ち振る舞いや運営にあたって、法律面・税務面で的確な支援が不可欠です。一般の弁護士さんは寺院の実態を知らず、うまく噛み合いません。その点、弁護士・税理士であり同じ宗門の僧侶でもある鈴木先生は希少で、お寺を間違った方向へ行かせない「防波堤」のように、じつに頼りになる存在です。



枅野俊明老師 曹洞宗徳雄山建功寺住職

## 檀信徒向け終活支援サービス



- **見守り契約**  
檀信徒の安否を自動で毎日見守り、孤独死を防止します。
- **死後事務委任契約**  
おひとりさまの葬儀と永代供養を実現し、無縁化を防止。
- **任意後見契約**  
認知症による護持会費未納を防ぎ、先祖供養を法的に守ります。
- **遺言書と遺言執行**  
財産の国庫帰属を防ぎ、故人の最後の意思を実現します。

### 詳しい資料をお送りいたします

檀信徒の終活支援  
のパンフレットを  
お送りいたします。



てらさぼ終活公式ページ



てらさぼ終活をご推薦いただきました

檀信徒の終活においては、専門的な知識・  
経験を持つ「善友」が欠かせません。

信頼は最上の親友である（ダンマパダ第二〇四偈）というお釈迦さまの言葉が示すように、人生の苦しみを乗り越えるには、知恵と、それを活かす専門的な知識や経験を持つ伴走者の存在が欠かせません。弁護士であり僧侶でもある鈴木先生たちが提供する〈てらさぼ終活〉は、単なるサービスに終わらない、檀信徒の「善友」になってくれるでしょう。



千葉公慈老師 曹洞宗富士山寶林寺住職 東北福祉大学学長

鈴木・五嶋法律事務所

〒110-0016 東京都台東区台東3-15-3 MARK SQUARE御徒町11F TEL. 03-5834-3230  
鈴木謙太：弁護士/税理士/曹洞宗僧侶 松原山醫王寺徒弟 五嶋良順：弁護士(共に第二東京弁護士会)

全国曹洞宗青年会の活動にご理解とご協力を賜り、衷心より御礼申し上げます。  
 お預かりした賛助費は活動の大きな支えとして活用させていただくとともに、  
 またボランティア基金として災害復興支援活動に充てさせていただきます。

◆福島県

- 14 円通寺様
- 101 成林寺様
- 119 長泉寺様
- 121 長泉寺様
- 156 大龍寺様
- 226 常隆寺様
- 352 大同寺様
- 461 正法寺様

◆宮城県

- 41 耕田寺様
- 202 皆傳寺様
- 222 護勢寺様
- 250 妙伝院様
- 275 観音寺様
- 310 洞福寺様
- 314 満福寺様
- 316 松盛院様
- 446 柳徳寺様

◆岩手県

- 8 源勝寺様
- 11 天昌寺様
- 67 永昌寺様
- 210 常樂寺様
- 276 慈眼寺様

◆青森県

- 105 東昌寺様
- 113 正洞院様
- 189 乗照寺様

◆山形県1

- 81 金勝寺様
- 158 清龍寺様
- 238 西来院様

◆山形県2

- 341 全龍院様
- 394 玉泉寺様
- 418 竜雲院様

◆山形県3

- 734 東光寺様

◆秋田県

- 184 護昌寺様
- 243 寶藏寺様
- 245 常泉寺様
- 258 鳳来院様
- 321 鏡得寺様
- 338 圓通寺様
- 353 安養寺様

◆北海道1

- 96 観音寺様

◆北海道2

- 379 法音寺様

- 龍象会 様

# ボランティア基金感謝録

2025年12月1日～2026年2月28日取扱い分

◆北海道1

- 北海道第1宗務所第2教区青年会道友会 様
- 曹洞宗北海道第1宗務所第1教区青年会道心会 様
- 札幌禅林青年会 様

◆北海道2

- 曹洞宗北海道第2宗務所第4教区青年会 様
- 曹洞宗北海道第2宗務所第3教区青年会 様
- 北海道第2宗務所第2教区青年部 様
- 曹洞宗北海道第2宗務所第6教区空知青年会 様
- 曹洞宗北海道第2宗務所第5教区一心会 様

◆北海道3

- 曹洞宗北海道第3宗務所第3教区道心会 様
- 曹洞宗北海道第3宗務所第5教区青年会玲瓏会 様

## インターネット受付分

◆秋田県

- 265 倫勝寺様

◆三重県第1

- 305 傳法院様

◆島根県1

- 5 地福寺様

◆島根県2

- 199 妙樂寺様



**クラウド型 曹洞宗のお坊さんが作った**  
**檀務効率化アプリ**   
 過去帳のクラウド化  
 本務寺・兼務寺一元管理  
 檀務スケジュール共有

お試し版  
ダウンロード  
iOS  
Android 対応

活用してみよう。

HiColor inc. 株式会社ハイカラ

**僧侶のための結婚相談所**  
 真実に結婚を考える身元のしっかりした8万名を超える会員様が活動されています。

隣にいてほしいのは、どんな人ですか。  
 あなたの婚活を応援します！

**無料相談 受付中**

▶ご予約 お待ちしております。

代客カウンセラー

男の婚活  
Produced by IBJ

あいおい結びの会 地方婚活応援事務局 〒104-0061 東京都中央区銀座1-12-4 N&E BLD.7階 070-3833-0800

# 賛助費浄納芳名簿

2025年12月1日～2026年2月28日取扱い分

## ◆東京都

90 梅岩寺様  
256 妙全院様  
333 雲慶院様  
374 善福寺様

## ◆神奈川県1

272 珠泉院様  
350 宗久寺様

## ◆神奈川県2

16 正観寺様  
56 宗泉寺様

## ◆埼玉県1

19 宝積寺様

## ◆群馬県

194 善宗寺様

## ◆栃木県

51 豊栖院様

## ◆茨城県

13 龍泉院様  
166 東光寺様

## ◆千葉県

2 宗胤寺様  
22 廣壽寺様  
25 萬福寺様  
29 慶林寺様  
59 宗徳寺様  
121 寶林寺様  
243 最勝福寺様

## ◆山梨県

151 龍華院様  
162 法久寺様  
212 慈観寺様  
555 自元寺様

## ◆静岡県1

7 元長寺様  
26 宝珠院様  
34 洞慶院様  
126 一乗寺様  
127 楞嚴院様

## ◆静岡県2

228 耕月寺様

## ◆静岡県3

1228 栄林寺様  
1314 西光寺様

## ◆静岡県4

1061 保福寺様  
1065 高林寺様  
1140 竹林寺様

## ◆愛知県1

53 普蔵寺様  
101 成福寺様  
108 香積院様  
112 太平寺様  
135 光明寺様  
313 長松寺様  
342 常楽寺様  
375 春江院様  
605 天徳寺様  
625 宝積寺様  
1191 智光院様  
1229 玉林寺様

## ◆愛知県2

684 花井寺様

## ◆愛知県3

431 報恩寺様  
496 常照寺様  
557 楞嚴寺様

## ◆岐阜県

15 東林寺様  
167 正宗寺様

## ◆三重県1

37 四天王寺様  
144 福源寺様  
276 地藏院様  
364 観音寺様

## ◆三重県2

401 光明寺様

## ◆京都府

236 善光寺様  
389 萬福寺様

## ◆大阪府

14 慈光寺様  
26 天徳寺様  
69 永興寺様  
98 吉祥院様

## ◆和歌山県

54 延命寺様  
64 祐川寺様

## ◆兵庫県1

3 歆喜寺様  
341 常嚴寺様

## ◆兵庫県2

103 東林寺様  
149 瑞光寺様  
217 長福寺様  
233 長谷寺様

## ◆岡山県

3 長川寺様  
28 洞松寺様  
177 幻住寺様

## ◆広島県

46 雙照院様  
58 宗光寺様  
86 西金寺様  
93 賢忠寺様  
102 潮音寺様  
117 龍雲寺様

## ◆山口県

4 宝蔵寺様  
25 弘濟寺様  
54 昌福寺様  
156 慶福寺様  
190 亨徳寺様

## ◆鳥取県

81 大岳院様  
82 吉祥院様  
139 養光院様  
146 妙楽寺様  
151 安国寺様  
170 大安寺様

## ◆島根県2

36 舜叟寺様  
63 龍覚寺様  
70 完全寺様  
157 慶用寺様  
187 養善寺様  
195 總光寺様

## ◆愛媛県

43 泉法寺様  
135 秀禅寺様  
146 興雲寺様

## ◆福岡県

5 妙徳寺様

## ◆長崎県1

42 西方寺様  
78 宝泉寺様

## ◆佐賀県

108 光明寺様  
194 普恩寺様

## ◆熊本県2

78 地藏院様  
122 國照寺様

## ◆宮崎県

35 法泉寺様

## ◆長野県1

57 長秀院様  
65 柳原寺様  
225 興国寺様  
243 廣徳寺様

## ◆長野県2

566 廣明寺様  
595 檢校庵様

## ◆福井県

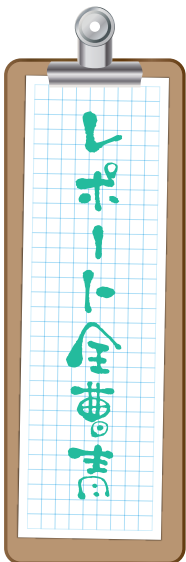
231 禅応寺様

## ◆新潟県1

362 長禅寺様  
393 曹源寺様  
394 常安寺様  
397 善昌寺様  
437 善祥寺様  
475 天昌寺様  
487 宝泉寺様  
496 長樂寺様

## ◆新潟県4

19 林照寺様  
185 見國寺様  
809 靈道寺様



## インスタグラム連載 「禅スタグラム」

4月よりインスタグラム連載「禅スタグラム」を開始いたしました。各地の様子を見比べて楽しんでいただけるような工夫を盛り込みながら、年中行事や仏具・荘厳などについて、より多くの方にお寺に興味を持っていただくことを目指した投稿を行っております。各種の活動報告や告知とあわせてぜひご覧ください。

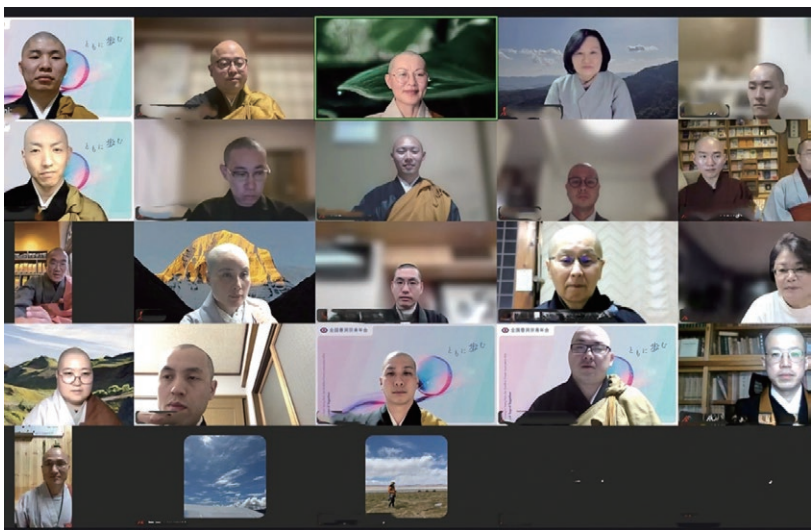


「禅スタグラム」掲載イメージ

## 【Korea-Japan Zen Club】 令和8年2月開催

令和8年2月27日（金）、韓国曹溪宗とのオンライン交流会を開催しました。昨年11月の韓国訪問と「ソウル国際禅瞑想サミット」へのブース出展を振り返り、日本側が滞在を通じて感じたこと、韓国側がそれを聞いた感想を交わし、お互いの理解を深めました。

この海を越えたご縁の輪をさらに広げていくべく、引き続きオンライン交流会や現地交流を計画してまいります。



両国からの参加者

## 精進料理教室「味来食堂」 僧食を学ぼう〜 静岡開催

令和8年1月18日（日）、静岡県静岡市の静岡ガス・エネリアシヨールーム静岡で開催しました。一般の参加者を募集し、20名の方にご参加いただきました。

ジャガイモの皮を素揚げにしてポタージュに添えたり、カブの葉を煮物の付け合わせにしたりと、素材を余すところなく味わう精進料理の心を、体験を通じて学んでいただきました。

新年度も対面イベントやオンラインの企画など、様々な形で禅の教えを広める活動を継続してまいります。



炊き込みご飯の具は出汁を取った後の昆布・椎茸・大豆  
ポタージュの付け合わせはジャガイモの皮の素揚げ

各種報告や告知をウェブ上でご覧いただけます



◀公式HP『般若』  
インスタグラム▶



### 表紙の話

出家者として「行持道環」を大切にしながら修行を続けていくこと、人々との「輪」を大切にしながらそれぞれが歩みを進めていき、その願いが「円満」に成就しますようにとの想いを靴の並びに込めて撮影しました。